昭和
文學全集

堀辰雄集

昭和二十八年七月二十日　初版印刷
昭和二十八年七月二十五日　初版發行

昭和文學全集18
堀辰雄集

著作者　堀辰雄
發行者　角川源義
印刷者　仙葉元太郎
東京都新宿區東大久保二ノ七八

發行所　東京都千代田區富士見町二ノ七
角川書店
振替東京一九五二〇八
電話九段一〇九四・八七〇八

本文紙　本州製紙株式會社
クロース　日本クロス工業株式會社
整版所　曉印刷株式會社
印刷所　中敎印刷株式會社
製本所　小高製本所

Printed in Japan

堀辰雄集

昭和文學全集

角川書店版

目次

卷頭寫眞
筆蹟
ルウベンスの僞畫 七
不器用な天使 一五
眠れる人 一五
聖家族 二五
恢復期 三一
第一部 四一
第二部 四三
あひびき 四七
燃ゆる頬 五三
麥藁帽子 五五
旅の繪 六一
美しい村 七一
序曲 七九
美しい村 八一
夏 九四
暗い道 一〇一
鳥料理 一〇五
挿話 一一
畫顏 一一六
風立ちぬ 一二一
序曲 一二一
春 一三三
風立ちぬ 一三八
冬 一四一
死のかげの谷 一四九
かげろふの日記 一五七
ほととぎす 一六六
幼年時代 一七五
無花果のある家 一七七
父と子 一九五
赤ままの花 一九七
入道雲 一九九
洪水 二〇三
芒の中 二〇八
幼稚園 二一一
口髭 二一三
小學生 二一四
エピロオグ 二一六
花を持てる女 二一九
巢立ち 二三一
晩夏 二三八
朴の咲く頃 二四七
榆の家 二五六
第一部 二五六
第二部 二六六
榮穗子 二七五
ふるさとびと 二七二
姨捨 二七〇
曠野 二七七
雉子日記 二七四
續雉子日記 二七六
信濃路 二七九
斑雪 二七九
麓の上にて 二七五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

辛夷の花
花あしび　二四七
樹下　三五〇
十月　三五〇
古墳　三五二
淨瑠璃寺の春　三六四
「死者の書」　三七〇
更級日記　三七三
雪の上の足跡　三七六
繪はがき　三八一
繪はがき一　三八五
手紙　三八六
繪はがき二　三八八
フローラとフォーナ　三八九
匈奴の森など　三九〇
四葉の苜蓿　三九六
人と書物　四〇一
二三の追憶　四〇一
「青猫」について　四〇二
高原にて　四〇五

詩　一四　三二
翻譯小品　二四
忘恩　二四
ガンの丘にて　二四
存在　二四
エリコの薔薇　二四
幻　二四
算術の稽古　二四
農耕　三〇
乾いた雨　三〇
六歳の肖像　三〇
二十歳の肖像　三〇
五十五歳の肖像　三〇
無題　六〇
冬　一一〇
雪　一五六
お前　三八〇
人が私に語るには　三八〇
空を飛ぶ子　四〇六
血　四〇六

譯詩　一一〇　二三〇　二四六
ソネット集　三一一
覺書　二一七
ジャム、君の家は
解說　吉田精一　四〇七
年譜　四一一

堀辰雄集

向日葵は西
洋人より背
が高い

軽井沢にて

辰雄

ルウベンスの僞畫

一

それは漆黑の自動車であつた。

その自動車が輕井澤ステエションの表口まで來て停まると、中から一人のドイツ人らしい娘を降した。

彼はそれがあんまり美しい車だつたのでタクシイではあるまいと思つたが、娘がおりるとき何か運轉手にちらと渡すのを見たので、彼は黃いろい帽子をかぶつた娘とすれちがひながら、自動車の方へ歩いて行つた。

「町へ行つてくれたまへ」

彼はその自動車の中へはひつた。はひつて見ると內部は眞白だつた。そしてかすかだが薔薇のにほひが漂つてゐた。彼はさつき無造作にすれちがつてしまつた黃いろい帽子の娘を思ひ浮べた。自動車がぐつと曲つた。

彼はふと好奇心をもつて車內を見まはした。すると彼は輕く動搖してゐる床の上にしちらされた新鮮な唾のあとを見つけたのである。ふとしたものであるが、妙に荒あらしい快さが彼をこすつた。目をつぶつた彼には、それが捲りちらされた花瓣のやうに見えた。

しばらくしてまた彼は目をひらいた。運轉手の背なかが見えた。それから彼は透明な窓硝子に顏を持つて行つた。窓の外はもうすつかり穗を出してゐる芒原だつた。ちやうど一臺の自動車がすれちがつて行つた。それはもうこの高原を立ち去つてゆく人々らしかつた。

町へはひらうとするところに、一本の大きい栗の木があつた。

彼はそこまで來ると自動車を停めさせた。

自動車は町からすこし離れたホテルの方へ彼のトランクだけを乘せて走つて行つた。

それのあげた埃が少しづつ消えて行くのを見ると、彼はゆつくり歩きながら本町通りへはひつて行つた。

本町通りは彼が思つたよりもひつそりしてゐた。彼はすつかりそれを見違へてしまふくらゐだつた。彼は每年この避暑地の盛り時にばかり來てゐたからである。

彼はしかしすぐに見おぼえのある郵便局を見つけた。

その郵便局の前には、色とりどりな服裝をした西洋婦人たちがむらがつてゐた。

歩きながら遠くから見てゐる彼には、それがまるで虹のやうに見えた。

それを見ると去年のさまざまな思ひ出がやつと彼の中にも蘇つて來た。やがて彼には彼女たちのお喋舌りが手にとるやうに聞えてきた。彼は彼女たちのそばをまるで小鳥の囀つてゐる樹の下を通るやうな感動をもつて通り過ぎた。

そのとき彼はひよいと、向うの曲り角を一人の少女が曲つて行つたのを認めたのである。

おや、彼女かしら！

さう思つて彼は一氣にその曲り角まで歩いて行つた。そこには西洋人たちが「巨人の椅子」と呼んでゐる丘へ通ずる一本の小徑があり、その小徑をいまの少女が歩いて行きつつあつた。思つたよりも遠くへ行つてゐなかつた。

そしてまちがひなく彼女であつた。

彼もホテルとは反對の方向のその小徑へ曲つた。その小徑には彼女きりしか歩いてゐないのである。彼は彼女に聲をかけようとして何故だか躊躇をした。すると彼は急に變な氣持になりだした。彼はすべてのものを水の中でのやうに空氣の中で感ずるのである。たいへん歩きにくい。おもはず魚のやうなものをふんづける。彼の貝殼の耳をかすめてゆく小さい魚もゐる。自轉車のやうなものもある。また犬が吠えたり、鷄が鳴いたりするのが、はるかな水の表面からのやうに聞えてくる。そして木の葉がふれあつてゐるのか、水が舐めあつてゐるのか、さういふかすかな音がたえず頭の上でしてゐる。

彼はもう彼女に聲をかけなければいけない

と思ふ。が、さう思ふだけで、彼は自分の口がコルクで栓をされてゐるやうに感ずる。だんだん頭の上でざわざわいふ音が激しくなる。ふと彼はむかうに見おぼえのある紅殻色のバンガロウを見る。

そのバンガロウのまはりに綠の茂みがあり、その中へ彼女の姿が消えてゆく。……

それを見ると急に彼の意識がはつきりした。彼は彼女のあとからすぐ彼女の家を訪問するのは、すこし工合が悪いと思つた。しかたなしに彼はその小徑を往つたり來たりしてゐた。いいことに人はひとりも通らなかつた。さうして漸く「巨人の椅子」の麓の方から近づいてくる人の足音が聞えたとき、彼は何を思つたのか自分でも分らずに、小徑のそばの草叢の中に身をかくした。彼はその隱れ場から一人の西洋人が大股にそして快活さうに歩き過ぎるのを見てゐた。

彼女はまだ庭園の中にゐた。彼女はさつき振りかへつたときに彼が自分の後から來るのを見たのである。しかし彼女は立止つて彼を待たうとはしなかつた。なぜかさうすることに羞しさを感じた。そして彼女はたえず彼の眼が遠くから自分の背中に向けられてゐるのをすこしむず痒く感じてゐた。彼女はその背中で木の葉の蔭と日向とが美しく混り合ひながら絶えず變化してゐることを想像した。

彼女は庭園の中で彼を待つてゐた。しかし彼はなかなか這入つて來なかつた。彼が何をぐづぐづしてゐるのか分るやうな氣がした。數分後、彼女はやつと門を這入つて來る彼を見たのであつた。

彼はばかに元氣よく帽子を取つた。それにつり込まれて彼女までが愛らしい、おどけた微笑を浮べたほどであつた。そして彼女は彼と話しはじめるが早いか、彼が肉體を恢復したすべての人のやうに、めうに新鮮な感受性を持つてゐるのを見のがさなかつた。

「お病氣はもういいの？」

「ええ、すつかりいいんです」

彼はさう答へながら彼女の顏をまぶしさうに見つめた。

彼女の顏はクラシックの美しさを持つてゐた。その薔薇の皮膚はすこし蒼たさうであつた。さうして笑ふ時はそこにただ笑ひが漂ふやうであつた。彼はいつもこつそりと彼女を「ルウベンスの僞畫」と呼んでゐた。

まぶしさうに彼女を見つめた時、彼はそれをじつに新鮮に感じた。いままでに感じたことのないものが感じられて來るやうに思つた。さうして彼は彼女の齒ばかりを見た。腰ばかりを見た。その間に、彼は病氣のことは少しも話さうとはしなかつた。さういふ現實の煩さかつたことを思ひ出すことは何の價値もないやうに彼は思つてゐた。そのかはりに彼は、眞白なクッションのある黑い自動車の中に黃いろい帽子をかぶつた娘の乘つてゐたのが、西洋の小說のやうに美しかつたことなどを好んで話すのだつた。そしてその娘の香ひがまだ殘つてゐた美しい自動車に乘つてきたのだと愉快さうに言つた。

しかし彼はその自動車の中に殘つてゐた唾のことは言はないでしまつた。さうした方がいいと思つたのだつた。が、それを言はないでゐると、その唾が花瓣のやうに感じられたあの時の快感がへんに鮮かにいつまでも彼の中に殘つてゐさうな氣がするのだ。こいつはいけないと思つた。その時から少しづつ彼は吃るやうに見えた。そして彼はもう不器用にしか話せなかつた。一方、さういふ彼を彼女は持てあますのだつた。そこでしかたがなしに彼女は言つた。

「家へはひりません？」

「ええ」

しかし二人はもつと庭園の中にゐたかつた。けれども今の言葉がをかしなものになつてしまひさうなので、二人はやつと家の中へはひらうとしたのであつた。

そのとき二人は、露臺の上からあたかも天使のやうに、彼等の方を見下ろしてゐる彼女の母に氣がついた。二人は思はず顏を赧らめながら、それをまぶしさうに見上げた。

二

翌日、彼女たちはドライヴに彼を誘つた。

自動車は夏の末近い寂しい高原の中を快い音を立てながら走つた。

三人は自動車の中ではほとんど喋舌らないでゐた。しかし風景の變化の中に三人ともほとんど同樣の快さを感じてゐたので、それは快い沈默であつた。ときどきかすかな聲がその沈默を破つた。が、それはすぐまた元の深い沈默の中に吸ひこまれてしまふので誰も何も言はなかつたのではないかと思はれるほどのものであつた。

「まあ、あの小さい雲……（夫人の指に沿つてずつと目を持つてゆくと、そこに、一つの赤い屋根の上に、ちやうど貝殼のやうな雲が浮んでゐた）ずゐぶん可愛らしいぢやないの」

それから後は淺間山の麓のグリイン・ホテルに着くまで、ずつと夫人の引きしまつた指と彼女のふつくらした指をかはるがはる眺めてゐた。沈默がそれを彼に許した。

ホテルはからつぽだつた。もう客がみんな引上げてしまつたので、今日あたり閉ぢようと思つてゐたのだ、とボオイが言つてゐた。

バルコニイに出て行つた彼等は、季節の去つた跡のなんとない醜さをまのあたりの風景に感じずには居られなかつた。ただ淺間山の麓だけが光澤のよいスロオプを滑らかに描いてゐた。

バルコニイの下に平らな屋根があり、低い欄干をまたぐと、すぐその屋根の上へ出られさうであつた。そんなに屋根が平らで、そんなに欄干が低いのを見たとき、彼女が言つた。

「ちよつとあの上を歩いて見たいやうね」

夫人は、彼と一しよに下りてもらへばいいぢやないのと彼女に應へた。それを聞くと彼は無造作に屋根の上に出て行つた。彼女も笑ひながら彼について來た。そして二人が屋根の端まで歩いて行つた時、彼はすこし不安になりだした。それは屋根のわづかな傾斜から身體の不安定が微妙に感じられるせゐばかりではなかつた。

その屋根の端で彼はふと彼女の手とその指環を見たのである。そして彼女が何でもなかつたのに滑りさうな眞似をして指環が彼の指を痛くするほど彼の手を強く摑むかも知れないと空想した。すると彼はへんに不安になつた。そして急に彼は屋根のわづかな傾斜を鋭く感じだした。

「もう行きませう」さう彼女が言つた時、彼は思はずほつとした。彼女は先に一人でバルコニイに上つてしまつた。彼もそのあとから上らうとして、バルコニイで夫人と彼女の話しあつてゐるのを聞いた。

「何か見えて？」

「ええ、私達の運轉手が、下でブランコに乘つてるのを見ちやつたのよ」

「それだけだつたの？」

皿とスプウンの音が聞えてきた。彼はひとりで顏を赧くしながら、バルコニイへ上つて行つた。

夫人の「それだけだつたの？」を彼はお茶をのんでゐる間や、歸途の自動車の中で、しきりに思ひ出した。その聲には夫人の無邪氣な笑ひがふくまれてゐるやうでもあつた。また、やさしい皮肉のやうでもあつた。それからまた、何んでも無いやうでもあつた。……

三

翌日、彼が彼女たちの家を訪問すると、二人とも他家へお茶に招ばれてゐて留守だつた。

彼はひとりで「巨人の椅子」に登つて見ようとした。が、すぐ、それもつまらない氣がして町へ引きかへした。そして本町通りをぶらぶらしてゐた。すると彼は、彼の行手に一人の見おぼえのあるお孃さんが歩いてゐるのに氣がついた。それは毎年この避暑地に來る或る有名な男爵のお孃さんであつた。

去年なども、彼はよく峠道や森の中でこのお孃さんが馬に乘つてゐるのに出逢つた。さういふ時いつも彼女のまはりには五六人の混血兒らしい青年たちがむらがつてゐるのであつた。一しよに馬や自轉車などを走らせながら。

彼もこのお孃さんを刺靑をした蝶のやうに美しいと思つてゐた。しかし、それだけのこ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

とで、彼はむろんこのお孃さんのことなどさう氣にとめてもゐなかつた。が、ただ彼女を取りまいてゐるさういふ混血兒たちは何とはなしに不愉快だつた。それは輕い嫉妬のやうなものであるかも知れないが、それくらゐの關心は彼もこのお孃さんに持つてゐたと言つてもいいのである。

それで彼は何の氣もなくそのお孃さんのあとから歩いて行つたが、そのうち向うからちらほらとやつてくる人人の中に、ふと一人の青年を認めた。それは去年の夏、ずつと彼女のそばに附添つてテニスやダンスの相手をしてゐた混血兒らしい青年であつた。彼はそれを見るとすこし顏をしかめながら出來るだけ早くこの場を離れてしまはうと思つた。その時、彼はまことに思ひがけないことを發見した。といふのは、そのお孃さんとその青年とは互にすこしも氣づかぬやうに裝ひながら、そのまますれちがつてしまつたからである。唯、そのすれちがはうとした瞬間、その青年の顏は惡い硝子を透して見るやうに歪んだ。それからこつそりとお孃さんの方をふり向いた。その顏にはいかにも苦にがしいやうな表情が浮んでゐた。

このエピソオドは彼を妙に感動させた。彼はその意地惡さうなお孃さんに一種の異常な魅力のやうなものをさへ感じた。勿論、彼はその混血兒の側にはすこしも同情する氣になれなかつた。

その晩はベッドへ横になつてからも、何度も同じところへ飛んでくる一匹の蛾のやうに、そのお孃さんの姿がうるさいくらゐに彼のつぶつた眼の中に現れたり消えたりするのであつた。彼はそれを拂ひ退けるために「ルウベンスの僞畫」を思ひ浮べようとした。が、それが前者に比べるとまるで變色してしまつた古い複製のやうにしか見えないことが、一そう彼を苦しめた。

四

しかし翌朝になつて見ると、そのふしぎな魅力は彼の蛾のやうにもう何處かへ姿を消してしまつてゐた。さうして彼は何となく爽やかな氣がした。

午前中、彼は長いこと散歩をした。そして、とあるロッヂの中で冷たい牛乳を飲みながら、しばらく休むことにした。彼はこんなに爽やかな氣分の中でなら、夫人たちに昨日からのエピソオドを打明けても少しもこだはるやうなことはないだらうと思つたほどであつた。

それは町からやや離れた小さな落葉松の林の中にあつた。

木のテエブルに頰杖をついてゐる彼の頭上では、一匹の鶯が人間の聲を眞似してゐた。

しかし彼はその鶯の言葉を聽かうとはしなかつた。彼は熱心に彼の「ルウベンスの僞畫」を虛空に描いてゐた。それが何時になく生き生きした色彩を帶びてゐるのが彼には快かつた。……

その瞬間、彼は彼のところからは木の枝に遮ぎられて見えない小徑の上を二臺の自轉車が走つて來て、そのロッヂの前に停まるのを聞いた。それからまだその姿は見えないけれど、若い娘特有の透明な聲が聞えてきた。

「なんか飲んで行かない？」

その聲を聞くと彼はびつくりした。

「またかい。これで三度目だぜ」さう若い男の聲が應じた。

彼は何となく不安さうに、ロッヂの中にはひつてくる二人を見つめた。意外にもそれはきのふのお孃さんだつた。それから彼のはじめて見る上品な顏つきをした青年だつた。

その青年は彼をちらりと見て、彼から一番離れたテエブルに坐らうとした。するとお孃さんが言つた。

「鶯のそばの方がいいわ」

そして二人は彼のすぐ隣りのテエブルに坐つた。

お孃さんは彼に背なかを向けて坐つたが、彼には何だかわざとかの女がさうしたやうに思はれた。鶯は一そう喧ましく人眞似をしだした。かの女はときどきその鶯を見るために背なかを動かした。その度毎に彼はかの

女の背なかから彼の眼をそらした。

お嬢さんはその青年と鸚鵡とをかはるがはる相手にしながら絶えず喋舌つてゐた。その聲はどうかすると「ルウベンスの僞畫」の聲にそつくりになつた。さつきこのお嬢さんの聲を聞いて彼がびつくりしたのはそのせゐであつたのだ。

お嬢さんの相手の青年はその顏つきばかりではなしに、全體の上品な樣子が去年の混血兒たちとはすこぶる異つてゐた。すべてがいかにもおつとりとして貴族的であつた。さういふ兩者の對照の中に彼は何となくツルゲエネフの小說めいたものさへ感じたほどだつた。この頃になつてこのお嬢さんはやつとかの女の境涯を自覺しだしたのかも知れない。……そんなことをいい氣になつて空想してゐると、彼は彼自身までがうつかりその小說の中に引きずり込まれて行きさうで不安になつた。

彼はもつとここに居て見ようか、それとも出て行つてしまはうかと暫く躊躇してゐた。鸚鵡は相變らず人間の聲を眞似してゐた。それをいくら聽いてゐても、彼にはその言葉がすこしも分らなかつた。それが彼にはなんだか彼の心の中の混雜を暗示するやうに思はれた。

彼はいきなり立ちあがると不器用な歩き方でロッヂを出て行つた。

ロッヂのそとへ出ると、二臺の自轉車がそのハンドルとハンドルとを、腕と腕とのやうにからみあはせながら、奇妙な恰好で、そこの草の上に倒れてゐるのを彼は見た。

そのとき彼の背後からお嬢さんの高らかな笑ひ聲が聞えてきた。

彼はそれを聞きながら、自分の體の中にいきなり惡い音樂のやうなものが湧き上つてくるのを感じた。

惡い音樂。たしかにさうだ。彼を受持つてゐるすこし頭の惡い天使がときどき調子はづれのギタルを彈きだすのにちがひない。

彼は自分の受持の天使の頭の惡さにはいつも閉口してゐた。彼の天使は彼に一度も正確にカルタの札を分配してくれたことがないのだ。

或る晩のことであつた。

彼は彼女の家から彼のホテルへまつ暗な小徑を、なんだか得體の知れない空虛な氣持を持てあましながら歸りつつあつた。

その時前方の暗やみの中から一組の若い西洋人達が近づいてくるのを彼は認めた。

男の方は懷中電氣でもつて足もとを照らしてゐた。そしてときどきその電氣のひかりを女の顏の上にあてた。するとそのきらきら光る小さな圓の中に若い女の顏がまぶしさうに浮び出た。

それを見るためには、その女が彼よりずつと背が高かつたので、彼はほとんど見上げるやうにしなければならなかつた。さういふ姿勢で見ると、若い女の顏はいかにも神々しく思はれた。

一瞬間の後、男は再び懷中電氣をまつ暗な足もとに落した。

彼は彼等とすれちがひながら、彼等の腕と腕が頭文字のやうにからみあつてゐるのを發見した。それから彼はその暗やみの中に一人きりに取殘されながら、なんだか氣味のわるいくらゐに亢奮しだした。彼は死にたいやうな氣にさへなつた。

さういふ氣持は惡い音樂を聞いたあとの感動に非常に似てゐた。

さういふ音樂的なへんな亢奮をしきりに振り落さうとして、彼はその朝もそこら中をむちやくちやに歩き廻つた。そのうちに彼は一つの見知らない小徑に出た。

そこいらは一度も來たことのないせゐか、町から非常に遠く離れてしまつたかのやうに思はれた。

そのとき彼はふと自分の名前を呼ばれたやうな氣がした。あたりを見廻して見たが、それらしいものは見えなかつた。をかしいなと思つてゐると、また彼の名前を呼ぶものがあつた。今度はややはつきり聞えたのでその聲のした方を振り向いてみると、そこには彼のゐる小徑から三尺ばかり高まつた草叢があり、その向うに一人の男がカンバスに向つてゐるのが見えるのだ。その男の顏を見ると彼

は一人の友人を思ひ出した。

彼はやつとこさその上に這ひ上つて、その友人のそばへ近よつて行つた。が、その友人は、彼にはべつに何にも話しかけようとせずに、そのまま熱心にカンバスに向つてゐた。彼も話しかけない方がいいのだらうと思つた。さうしてそこへ腰を下ろしたまま黙つてその描きかけの繪を見まもつてゐた。彼はときどきその繪のモチイフになつてゐる風景をそのあたりに捜したりした。しかしそれらしい風景はどうしても捜しあてることが出來なかつた。なにしろその畫布の上には、唯、さまざまな色をした魚のやうなものや小鳥のやうなものや花のやうなものが入り混つてゐるだけだつたから。

しばらくその奇妙な繪に見入つてゐたが、やがて彼はそつと立ちあがつた。すると立ちあがりつつある彼を見上げながら、友人は言つた。

「まあ、いいぢやないか。僕は今日東京へ歸るんだよ」

「今日歸る？　だつて、まだその繪、出來てないんぢやないの？」

「出來てないよ。だが僕はもう歸らなければならないんだ」

「どうしてさ」

友人はそれに答へるかはりに再び自分の繪の上に眼を落した。しばらくその一部分に、彼の眼は強く吸ひつけられてゐるかのやうであつた。

五

彼はひとり先きにホテルに歸つて、晝食を共にしようと約束をしたさつきの友人の來るのを客間で待つてゐた。

彼は客間の窓から顔を出して中庭に咲いてゐる向日葵の花をぼんやり眺めてゐた。それは西洋人よりも背高く伸びてゐた。

ホテルの裏のテニス・コオトからはまるで三鞭酒を拔くやうなラケットの音が愉快さうに聞えてくるのである。

彼は突然立上つた。そして窓ぎはの卓子の前に坐り直した。それから彼はペンを取りあげた。しかしその上にはあいにく一枚の紙もなかつたので、彼はそこに備へ付けの大きな吸取紙の上に不恰好な字をいくつもにじませて行つた。

ホテルは鸚鵡
鸚鵡の耳からジュリエットが顎をだす
しかしロミオは居りません
ロミオはテニスをしてゐるのでせう
鸚鵡が口をあけたら
黒ん坊がまる見えになつた

彼はもう一度それを讀み返さうとしたが、すつかりインクがにじんでしまつてゐて何を書いたのか少しも分らなくなつてしまつてゐた。

それでもやはり彼は、約束の時間よりもすこし遲れてやつてきた友人がひよいとそれを覗き込んだ時には、それを裏返しにした。

「隱さなくてもいいぢやないか？」

「これは何でもないんだ」

「ちやんと知つてるよ」

「何をさ」

「一昨日、いいところを見ちやつたから」

「一昨日だつて？　なんだ、あれか」

「だから今日は君が奢るんだよ」

「あれは、君、そんなもんぢやないよ」

あれはただ淺間山の麓まで彼女たちのお供をしただけだ。「たつたそれだけ」だつたのだ。——彼は再びその時の夫人の言葉を思ひ出した。そしてひとりで顔を赧くした。

それから彼等は食堂へはひつて行つた。それを機會に彼は話題を換へようとした。

「ときに君の繪はどうしたい？」

「僕の繪？　あれはあのままだ」

「惜しいぢやないか？」

「どうも仕方がないんだ。ここは風景は上等だが、描きにくくて困るね。去年も僕は描きに來たんだが駄目さ。空氣があんまり良すぎるんだね。どんなに遠くの木の葉でも、一枚一枚はつきり見えてしまふんだ。それでどうにもならなくなるんだよ」

「ふん、そんなものかね……」

彼はスウプを匙ですくひながら、思はずそ

の手を休めて、自分自身のことを考へた。ことによると自分と、彼女との關係がちつとも思ふやうに進行しないのは、ひとつはここの空氣があんまり良すぎて、どんなに小さな心理までも互にはつきり見えてしまふからかも知れない。彼はそれを信じようとさへした。

そして彼は考へた。描きかけの風景畫をたづさへてこれから東京へ歸らうとしてゐるこの友人と同樣に、自分もまた數日したら、それも恐らく描きかけのままになるであらう自分の「ルウベンスの僞畫」をたづさへて再びここを立ち去るより他はないであらう？

午後になつて、その友人を町はづれまで見送つてから、彼はひとりで彼女の家を訪れた。

丁度ふたりでお茶を飲んでゐるところだつた。彼を見ると夫人は急に思ひ出したやうに彼女に言つた。

「あの乳母車にのつてゐる寫眞をお見せしないこと？」

彼女は笑ひながらその寫眞を取りに次の部屋にはひつていつた。その間彼の眼のうちには、彼女の幼時の寫眞の古い茸のやうな色がひとりでに溜つてくるやうだつた。次の部屋から再び歸つてきた彼女は彼に二枚の寫眞を渡した。が、それは二枚とも彼の眼をまごつかせたくらゐに撮影したばかりの新鮮な寫眞だつた。それはこの夏この別莊の庭で、彼女が籐椅子に腰かけてゐるところを撮らせたものらしかつた。

「どつちがよく撮れて？」彼女が訊いた。

彼は少しどぎまぎしながら、近視のやうに眼を細くしてその二つの寫眞を見較べた。彼は何とはなしにその一つの方を指してしまつた。そのとき彼の指の先がそつとその寫眞の頰に觸れた。彼は薔薇の花瓣に觸れたやうに思つた。

すると夫人はもう一つの方の寫眞を取りあげながら言つた。

「でも、この方がこの人には似てゐなくて？」

さう言はれて見ると、彼にもその方が現實の彼女によりよく似てゐるやうに思はれた。そしてもう一つの方は彼の空想の中の彼女に、――「ルウベンスの僞畫」にそつくりなのだと思つた。

しばらくしてから、彼は實物を見ないうちに消えてしまつたさつきの古い茸のやうな色をしたヴイジョンを思ひ出した。

「乳母車といふのはどれですか？」

「乳母車？」

夫人はちよつと分らないやうな表情をした。が、すぐその表情は消えた。そしてそれはいつもの、やさしいやうな皮肉なやうな獨特の微笑に變つていつた。

「その籐椅子のことなのよ」

そしてそのやうに和やかな空氣が、相變らずその午後のすべての時間の上にあつた。

これがあれほど彼の待ち切れずに待つてゐたところの幸福な時間であらうか？

彼女たちから離れてゐる間中、彼は彼女たちにたまらなく會ひたがつてゐた。そのあまりに、彼は彼の「ルウベンスの僞畫」を自分勝手につくり上げてしまふのだ。すると今度はその心像（イマアジュ）が本當の彼女によく似てゐるかどうかを知りたがりだす。そしてそれがますます彼を彼女たちに會ひたがらせるのであつた。

ところが現在のやうに、自分が彼女たちの前にゐる瞬間は、彼はただそのことだけですつかり滿足してしまふのだ。そしてその瞬間までの、その心像（イマアジュ）が本當の彼女によく似てゐるかどうかといふ一切の氣かりは、忘れるともなく忘れてしまつてゐる。それといふのも、自分が彼女たちの前にゐるのだといふことを出來るだけ生き生きと感じてゐたいために、その間中、彼はその他のあらゆることを、――果してその心像（イマアジュ）が本當の彼女によく似てゐるかどうかといふ前日からの宿題さへも、すつかり犧牲にしてしまふからだつた。

しかし漠然ながらではあるが、自分の前にゐる少女とその心像の少女とは全く別な二個の存在であるやうな氣もしないではなかつた。ひよつとしたら、彼の描きかけの「ルウベンスの僞畫」の女主人公の持つてゐる薔薇の皮膚そのままのものは、いま彼の前にゐる

ところの少女に缺けてゐるかも知れないのだ。

二つの寫眞のエピソオドが彼のさういふ考へをいくらかはつきりさせた。

夕暮になつて、彼はホテルへのうす暗い小徑をひとりで歸つていつた。

そのとき彼はその小徑に沿うた木立の奥の、大きい栗の木の枝に何か得體の知れないものが登つてゐて、しきりにそれを搖すぶつてゐるのを認めた。

彼が不安さうに、ふとすこし頭の悪い自分の受持の天使のことを思ひうかべながら、それを見あげてゐると、なんだか淺黑い色をした動物がその樹からいきなり飛び下りてきた。それは一匹の栗鼠だつた。

「ばかな栗鼠だな」

そんなことを思はずつぶやきながら、彼はうす暗い木立の中をあわてて尻尾を背なかにのせて走り去つてゆく栗鼠を、それの見えなくなるまで見つめてゐた。

＊＊

詩

天使達が
僕の朝飯のために
自轉車で運んで來る
パンとスウプと
花を

すると僕は
その花を挿つて
スウプにふりかけ
パンに付け
さうしてささやかな食事をする

＊

この村はどこへ行つてもいい匂がする
僕の胸に
新鮮な薔薇が挿してあるやうに
そのせゐか　この村には
どこへ行つても犬が居る

＊

西洋人は向日葵より背が高い

＊

ホテルは鸚鵡
鸚鵡の耳からジュリエットが顔をだす
しかしロミオは居りません
ロミオはテニスをしてゐるのでせう
鸚鵡が口をあけたら
黑ん坊がまる見えになつた

軽井澤にて

僕は歩いてゐた
風のなかを

風は僕の皮膚にしみこむ

この皮膚の下には
骨のヴァイオリンがあるといふのに
風が不意にそれを
鳴らしはせぬか

＊

硝子の破れてゐる窓
僕の蝕齒よ
夜になるとお前のなかに
洋燈がともり
ぢつと聞いてゐると
皿やナイフの音がしてくる

不器用な天使

一

カフエ・シャノアルは客で一ぱいだ。硝子戸を押して中へ入つても僕は友人たちをすぐ見つけることが出來ない。僕はすこし立止つてゐる。ジャズが僕の感覺の上に生まの肉を投げつける。その時、僕の眼に笑つてゐる女の顏がうつる。僕はそれを見にくさうに見つめる。するとその女は白い手をあげる。その手の下に、僕はやつと僕の友人たちを發見する。僕はその方に近よつて行く。そしてその女とすれちがふ時、彼女と僕の二つの視線はぶつかり合はずに交錯する。

そこに一つのテイブルの周りを、三人の青年がオオケストラをうるささうに默りながら、取りまいてゐる。彼等は僕を見ても眼でちよつと合圖をするだけである。そのテイブルの上には煙りの中にウイスキイのグラスが冷く光つてゐる。僕はそこに坐りながら彼等の沈默に加はる。

僕は毎晩、彼等と此處で落ち合つてゐた。僕は二十だつた。僕はいままで殆ど孤獨の中にばかり生きてゐた。が、僕の年齡はもはや僕に一人きりで生きてゐられるためのあらゆる平靜さを與へなかつた。そして今年の春から夏へ過ぎる季節位、僕に堪へがたく思はれたものはなかつた。

その時、この友人たちが彼等と一緒にカフエ・シャノアルに行くことに僕を誘つた。僕は彼等に氣に入りたいと思つた。そして僕は承諾した。その晩、僕は彼等の一人の槇が彼の「ものにしよう」として夢中になつてゐる一人の娘に會つた。

その娘はオオケストラの間に高らかに笑つてゐた。彼女の美しさは僕に、よく熟していまにも木の枝から落ちさうな果實のそれを思はせた。それは落ちないうちに摘み取らなければならなかつた。

その娘の危機が僕をひきつけた。

槇はひどい空腹者の貪慾さをもつて彼女を欲しがつてゐた。彼のはげしい欲望は僕の中に僕の最初の欲望を眼ざめさせた。僕の不幸はそこに始まるのだ。……

突然、一人が彼の椅子の上に反り身になつて僕の方をふり向く。そして何か口を動かしてゐる。が、音樂が僕にそれを聞きとらせない。僕は彼の方に顏を近よせる。

「槇は今夜、あの娘に手紙を渡さうとしてゐるのだ。」

彼はすこし高い聲でそれを繰り返す。その聲で槇ともう一人の友人も僕等の方をふり向く。眞面目に微笑する。そしてまた、前のやうな沈默に歸つてしまふ。僕はひとり顏色を變へる。僕はそれを煙草の煙りで隱さうとする。しかし、今まで快く感じられてゐた沈默が急に僕には呼吸苦しくなり出す。ジャズが僕の咽頭をしめる。僕はグラスをひつたくる。僕はそれを飲まうとする。が、そのグラスの底に見える僕の狂熱した兩眼が僕を怖れさせる。僕はもうそれ以上そこに居ることが出來ない。

僕はヴェランダに逃れ出る。そこの薄くらがりは僕の狂熱した眼を冷やす。そして僕は誰からも見られずに、向うの方に煽風機に吹かれてゐる娘をぢつと見てゐることが出來る。風のために顏をしかめてゐるのが彼女に思ひがけない神々しさを與へてゐる。ふと、彼女の顏の線が動搖する。彼女がこちらを向いて笑ひだす。一瞬間、僕はヴェランダから彼女をぢつと見てゐる僕を認めて彼女が笑つたのだと信じる。が、僕はすぐ自分の過失に氣づく。うす暗いヴェランダに立つてゐる僕の姿は彼女の方からは見える譯がない。彼女は誰かに來いと合圖をされたのだらうか。僕はそれが槇ではないかと疑ふ。彼女は思ひ切つたやうにこちらを向いて歩き出す。

僕は僕の手を果實のやうに重く感じる。僕はそれをヴェランダの手すりの上に置く。手すりは僕の手を埃だらけにする。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com